

株式会社へ商号変更（株式会社ニッシンより社名変更）

関係団体 愛媛県貸金業協会理事

最終学歴 愛媛県立大洲中学校

卒業年 昭和十九年中退

軍歴 昭和十九年四月 大刀洗陸軍飛行学校第一期特別幹部候補生として入校

昭和十九年十一月 錦州一六六七五飛行団第五練習隊入隊

昭和二十二年八月 シベリアより復員

家族構成 公恵（妻） 道正（長男） 邦彦（次男）

（みどり（長女））

趣味 読書、旅行、能

（愛媛県 山本 繁夫）

ソ連抑留中

哀しみと憤りの追憶雑感

愛媛県 東 義 之

国際法上の根拠も無視し、昭和二十（一九四五）年八月九日早朝、スターリンはアメリカによる原爆投下により、日本の無条件降伏のバスに乗り遅れまいと対日宣戦を布告し、満州全域に侵攻し、これにより関東軍、開拓団、開拓青少年義勇軍、在満邦人の悲劇の始まりである。火事場泥棒的な参戦により、全満より食糧（食料品）、衣料品は云うに及ばず、重工業施設品、他を連日連夜トラックにて自国に戦利品と称し持ち去り、同時にウラジオストク経由、東京ダモイと偽り、マンドリンなる武器のソ連兵の警備のもと、連日、気の遠くなる様な道程を連行され、ソ連の旧囚人施設跡に収容される。

齢八十有余年にして、今、六十年余の過去を思

うまに断片的に定かでない記憶をたどりつつ記してみる。

一週間に一度の入浴（桶に一杯の湯を浴びるだけ）。その間に着用していた下着はシラミ退治のため滅菌消毒する。濡れタオルが部屋に帰る数分間に寒さで棒切れのようになった。

夜は、今、食事が済んだばかりの空腹をかかえて各々が故郷の食べ物で紹介の話に花が咲く（大福餅、ぼた餅、すし等と）。早く帰って腹いっぱい食べたいと語り合い、はかない現実を嘆きつつ眠りにつく。

入ソ当時流行の熱発と下痢で、夕べ語りし友は目覚めると冷たくなっており、冬の死者は寒さで棒切れの様になり、今まで着用していた衣類は官物と言う事で下着まで剥ぎ取り、全裸にしたのち、雪の山中にソリで運び、一部を除雪し、コンクリートのごとくカチカチの硬土をツルハシにて数時間かけても掘れず、浅い穴に死体を横たえ、その上に採集してきた乾草を掛け、掘り上げた土と雪

をかける。やがては自分等もこのような様になるかとも思いながら、亡き友と別れを告げた悲しみを昨日のごとく思い出し胸がつまる（冬期以外は体験しなかった）。

書物によるとソ連、北朝鮮は他と語る時、必ず同志〇〇と呼び、我々日本人もソ中では必ずそう呼び合っていた。今思うと、最も嫌忌する共産用語である・

今は見ても気味悪く怖いヘビであるが、二、三度、山中作業中、食したことがある。捕えて首を棒で頭をはさみ皮を剥ぐと、棒にくるくると捲き付く、それを火であぶるとジュジュと油を出しコングリと焼くと、うなぎの蒲焼のごとく実に美味であり、小グループで仲良く平等に寸を計って食したものである。そのおいしいヘビもシベリアの地ではめつたに姿を見せず、またトイレに人糞を求めてくるネズミを捕まえて食しようと思ひしも、実に足が早くて一匹も捕獲できず。

山中には毒々しいまでに赤や黄色の丸い傘のキ

ノコが出る。何度が採取して食してみたいと思ひしも、猛毒キノコで、食すると直ぐ死亡する故、ソ連側からきつく注意されていたため、食した事はない。聞くところでは、それでも空腹に耐えられず食して死亡した友もいたと聞く。

抑留一年目の春ごろより、共産主義を称える日本新聞なるものが出発、日一日と思想教育が激しくなり、ソ連を祖国と呼び、ファシズムの日本より解放してくれた万国労働者の父、偉大なるスターリン大元帥に感謝状を捧げると「おごそかなる」署名式をも行った。

作業に出ても食事後、新聞輪読会を行い、夕食後は昼間に作業で疲れていても、マルクス・レーニン主義なる思想勉強会。

酷寒のシベリアにも春の訪れとともに、祖国ダモイの噂がチラホラします。ソ連側は（民主主義者とハラシヨウラポータ）により、帰国さすとの事を指導者より達しあり、以後自分こそは民主主義者であり、早く選ばれて早期帰国せんものと、

歪むものだと思われる民主主義運動が激しくなり、連日のごとく批判会がもたれ、ターゲットされた人は、大衆の前に立たされ、反省会がもたれ、自己批判を強いられ（そうだ！ そうだ！ 同感）と云う合言葉の喧々囂々たる野次が飛び交い、自然失の状態になり、精神的に参ってしまふ。主として、旧将校、警官、憲兵、高学歴者であった。

在ソ中、民主運動盛んなりしころ（何かおつとりとし、自己主張もあまりせず）、良家出身の友は常に「日和見主義者」「反動分子」「ブルジョワジ―の手先」と何かに付けて批判され、常にターゲットにされ、大衆の前に出され、いつものごとく「そうだ！ そうだ！ 同感」の野次で呆然失の友を目の前にしながら、当時としては助言もどうすることも出来なかつた友に対し、申し訳なさと、自己の不甲斐なさに、今改めて悔いるばかりである。

共に毎夜、床の中で日本帰国の夢と食べ物話を語りし友も今いずこ……。遠い北の果ての国シ

ベリアの地に眠っておわすや……。どうか友の霊よ、安らかに眠り給え！二度とあのような悲劇が繰り返される事のない様、残された我々が語りついでゆく事を誓う。「合掌」

酷寒・空腹・重労働の三苦に耐える事四年、ついに帰国の時が来た。汽車にて最終、集結地のナホトカの収容所に着き、横付けされた出迎への船を見た時は胸が詰まった。だが乗船までの毎日が大変であった。

連日が闘争歌なる労働歌の練習、狂おしいまでの共産賛歌と踊り（ダンス）の練習。アクチーブなる指導者の思想教育。何度も何度も、有りもしない所持品の検査、アクチーブ立ち合いのもと、ソ連学校の検査。

指導者は曰く「同志は帰国ではなくファシズムの反動の国、天皇島に敵前上陸するのである」と。

また、上陸後は直ちに東京代々木の日本共産党本部に馳せ参じ、入党の手続きすべし、不本意な者は直ちにソ連側に通告し、一段なりとも乗船のタ

ラップを踏む事なく奥地の収容所に逆送すべく処置をすると脅かし、万国労働者の祖国ソ連のため、同志よ元氣を出して天皇島に上陸し、スターリンに報恩せよと

“タラップを踏んで乗船、何年ぶりの日本人船員と語り、船中の日本食をし、翌日ははるか日本の島々を船上より眺めた時は万感胸に嬉しさで胸がつまり、涙が止めどもなく溢れた。この様な感激（感動）と嬉しさは終世を通じて二度と味わう事はなからう。舞鶴・京都と帰途、各駅で婦人会、学生、他と「長い間ご苦勞様でした」と、実にやさしく出迎えて下さり、感謝と感激でいっぱいであつた。

かくして我々が故郷に帰り着く事が出来たのである。

乗船時ナホトカで所持品検査によりすべて没収され、遺品もなく、友より聞きし、うる覚えの地名を頼り、復員後の夏のある暑い日、友の報告をすべく東京杉並区に赴いた。友より聞いていた豪

邸は先の空襲で跡形もなく、パラックの仮住まいで、ご両親は友を案じつつ帰りを待ちきれず他界された由、友と瓜二つのよく似た姉上に迎えられ、姉上に涙の報告をし、仏壇のご両親に報告し、引き留める中を再度の訪問を約して退去する。

共に慰め、励ましあつた親愛の友の御霊よ、迷うことなく早く待ちわびる我が家へ帰らん事を心より祈る。

外出時、ふらつく足元を杖にて確保し、悲哀を感じながらも、自分にもあんな元気な時もあったと自愛してみる。

(今を去ること、その昔、若かりし日、柔道部に席を置き、部活動で先輩達に鍛えられし、闘志を燃やし、体力気力ともに有つた昔を懐古し、負け惜しみを感じ、力んでみるもいかんともしがたし。)

日常生活においても妻の支えなくしてはどうにもならない日々の現実なれど、自分の加齢になることも忘れ、夏、冬が過ぎれば、やがては桜の咲

く待望の春も訪れるであろう。その時期に、毎年の家族揃つての桜鑑賞旅行をと、ほんのささやかな夢を追いつつ、早くも来春を待ちわびるこのころである。

何年か前の春うるわしいころ、古都京都と舞鶴へ妻と小旅行した。舞鶴の港の岡に立つと、日本海は穏やかに凪いでいた。此方の島に向い、遠い北の果てソ連の地に眠る友に安かれと祈りを捧げる。あの有名な「異国の丘」のメロディがもの悲しい憂いを帯びて流れてくる。(我慢だ待っていて、嵐が過ぎりや、帰る日も来る 春が来る)あの苦しかった在ソを追憶し、熱いものがこみ上げてきた。

妻と二人、涙で言葉も出ず、追懐の栈橋で記念の写真も撮る。

記念館にて収容所内の写真展、記事を見て回り、昔日の自分を懐古する関係の本、数冊を買って帰る。今まで各方面に遊びし旅行中で、私にとって最も意義深い舞鶴旅行であった。

最後になりましたが、シベリアの地に眠る御靈
のご冥福を再度お祈り申し上げます。「合掌」

追記

作業の途次、丸い物につまづき、急いで馬鈴薯
と思い、大事に懐に入れて持ち帰り、ワクワクと
期待を込めてペチカで焼くと溶けて馬糞の臭いプ
ンブン！ 友とガツカリした。

【執筆者の紹介】

生年月日 大正十三年七月生まれ

出生地 愛媛県東温布（旧川内）井内甲 父

直局、母 フユの次男

経歴 地元の西谷小学校卒業

昭和十六年十二月 県立松山工業卒
業

満州県新京 満州鉦山に勤務 一年
で兵役に服す

昭和二十年九月 入ソ後コムソモ
リスク、ホルモリン地区で強制労働

昭和二十四年七月 復員

松山市にて、愛媛県職業安定所、建設省土木松
山事務所、住友建設松山支店等勤務、東建設（自
営）を経営。子供二人